

空とぶ てんとう虫



◀大豆プロジェクト

8月30日(土)、今年で15回目になる大豆トラスト畑の交流会が岩見沢市北村でありました。お天気にも恵まれ楽しい交流会でした。(報告記事は7頁)



▲食育プロジェクト

8月23日(土)、食育講座の現地学習を安平町の「無何有の郷農園」「またたびFarm」で行いました。収穫体験と、命を食べていることを学びました。(報告記事は7頁)



◀会員交流会

9月6日(土)、会員交流会を札幌市南区の八剣山果樹園で開きました。ピアンカさんから自然エネルギーなどのお話を聞きました。(報告記事は9頁)

発行

NPO 法人 北海道食の自給ネットワーク
札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内
TEL (090) 2818-5502 FAX (011) 789-8890

ホームページアドレス
<http://jikyuu.net>
E-mail: info@jikyuu.net

今月の話題

アニマルウェルフェア(家畜福祉)について考える(第1回)

帯広畜産大学畜産学部講師 瀬尾 哲也
(北海道・農業と動物福祉の研究会共同代表)

なぜアニマルウェルフェアなのか

「安全な食べ物は健康な家畜から生産される」ことに異議を唱える消費者は少ないでしょう。一般的に農家で飼育されている多くの家畜が健康に育てられているとは言いづらいです。海外輸入した多量の穀物飼料を与えられ、短期間に多くの生産を上げるように家畜は改良され育てられています。

牛乳パックに描かれているように放牧される牛は少なくなり、多くの牛は一生牛舎の中で育てられます。生産効率追求のために、家畜に多くの負担を負わせるようになってしまったのです。その家畜を育てる農家は、朝から晩まで農作業に追われ、牧歌的な生活とは程遠く、日々生懸命仕事をされています。

どうしてそのような生産システムになったのでしょうか。私も含めて消費者にも責任があると思います。自分の食べ物がどのように作られているのか関心をもたなくなってきました。ただ低価格で手軽に食べられるおいしいもの、コンビニ弁当や、ファーストフードのようなものが好まれます。

スーパーでは牛乳や卵は目玉商品とされ、毎日のように牛乳や卵の値段が変わり、1円でも安いものを目指して買い物に出かける多くの人たちもそのシステムを支えているのです。よい食品は低価格では作れません。低価格にできるのはそれなりの理由があるのです。

適正価格であるかが重要なのです。値段と消費期限で食べ物を選ぶのはそろそろ終わりにできないのでしょうか。毎日が無理であれば、週1回、あるいは誕生日などの特別な日にだけでも、本当に欲しい食品を手にするようにしたい。スマートフォンや携帯電話には優先的に支払いをしているのに、一番大切な食事をおろそかにするのはどこか間違っていると思います。

アニマルウェルフェアという考え方を紹介します。乳・肉製品を手にとされる時に思い出していただくと幸いです。

1. アニマルウェルフェア(家畜福祉)の考え方

人間に生きる権利が保障されているのであれば、人間以外の動物にもその権利を与える必要があると考える「動物の権利」思想と、「アニマルウェルフェア」の考え方とは根本的に異なるものです。「動物の権利」思想は、家畜を人間のために利用することを否定しますが、「アニマルウェルフェア」の考え方は、動物を人間のために利用することを認め、「苦痛・苦悩」を排除した飼育管理を目指すというものであり、これまでの畜産の在り方を反省し、感受性をもつ生き物としての家畜に心を寄り添わせ、誕生から屠殺までの間、快適性に配慮した飼育方法を目指そうとする考え方です。

2. EUでアニマルウェルフェアへの関心が高まったのは消費者の声

このアニマルウェルフェアの考え方の基になったものが、イギリスの主婦ルース・ハリソンによって1964年に書かれた著書『アニマル・マシーン(工場畜産)』です。経済成長に伴い、家畜の飼養頭数が大幅に増加した結果、家畜の集約的飼育方式が一般化してきました。この本の中でルース・ハリソンは、命のある家畜を人間の欲求のままに、まるで肉、乳、卵の製造機械のようにしか扱っておらず、まるで工場でそれらを生産しているようだと言いました。

この本によってアニマルウェルフェアという考え方が市民に広まり、イギリス議会はノースウエールズ大学教授のプランベルを委員長とする専門委員会を作り、科学的調査を行ってプランベルレポートとして答申しました。そこには「福祉とは、肉体的健康および精神的健康の双方をカバーする広義な言葉である。したがって福祉は動物自体の構造、生理および行動から判断する動物自体の心的体験に関する科学的事実をもとに考慮されねばならない」と述べられています。そして家畜であっても生存している限り、不必要な痛みや苦しみを受けないという権利の保障を求める「アニマルウェルフェア」という思想から、家畜の飼育方式を規制するための法的体制が整えられ始めたのです。

EU(欧州連合)では、1998年に農用動物保護指令が施行され、さらに採卵鶏、豚、子牛のそれぞれに飼養基準が定められています。成牛のものはまだないが、子牛に関しては1991年に採択され1997年に一部改正された指令があります。そこでは8週齢以降の単飼ペンでの飼養や哺乳時以外のつなぎ飼いを禁止し、面積、照明、飼料等についても規定しています。

1993年にイギリス政府により設立された農用動物福祉審議会(FAWC)は、次の5つの自由(5フリーダムス)を提唱し、これがアニマルウェルフェアに関する世界的な共通認識となっています。

①飢えと渇きからの自由、②疾病や怪我からの自由、③不快環境からの自由、④正常行動を発現する自由、⑤恐怖や苦悩からの自由一です。これらの自由を最大限満たすことが家畜の福祉レベルを向上させることにつながります。家畜自身が「どう感じているか」を科学的にとらえることが、極めて重要となります。

世界家畜保健機構(OIE)(旧国際獣疫事務局)は、2013年9月現在178カ国が加盟する国際的獣医防疫機関です。疾病の伝播防除にとどまらず、家畜の健康とアニマルウェルフェアは密接な関係にあると認め、アニマルウェルフェアの世界基準となるガイドラインの作成を検討しています。2004年の総会でアニマルウェルフェアの原則に関する指針を採択し、2005年にはアニマルウェルフェアの4つの基準を採択しています。

4つの基準とは、食用家畜の屠殺、陸上輸送、海上輸送、病気管理目的の処分に関するものです。その後、家畜種別の飼育管理に関する基準が検討されはじめ、2012年にアニマルウェルフェアと肉牛生産システム、2013年にアニマルウェルフェアとブロイラー生産システムが採択されました。今後は他の家畜についても順次作成される予定であり、世界各国の生産現場に強い影響を及ぼすでしょう。

3. アニマルウェルフェアに関する欧米の動向

欧米では、動物保護団体や生産団体により飼育基準(評価法)が定められています。ま

ず、最もよく知られている英国王立動物虐待防止協会の評価法を紹介します。

この協会はイギリスの最も古い動物保護団体であり、消費者にアニマルウェルフェアに配慮して飼育された生産物かどうかを提示するために、1994年にフリーダムフードという食品ラベルを開発しました。5フリーダムスを満たすことをベースとして作成された評価基準であり、これらを満たしていればその生産物にこのラベルを表示し販売できます。

飼育管理のみならず、輸送、屠殺まで、1年に1回程度チェックされます。現在、肉用鶏、七面鳥、アヒル、採卵鶏、雛、豚、羊、肉用牛、乳用牛および養殖用鮭についての基準が作成されています。年に9億頭もの家畜がこの認証を受けた農場で生産されています。さらにイギリス環境・食料・農村地域省(DEFRA)が作成したCode of Recommendations for the welfare of livestockに記された法律を熟知することも要求されています。

アメリカにも、同様な評価基準が存在します。2003年に設立されたアメリカのNPO組織が「人道的家畜管理(Humane Farm Animal Care)」というラベリングを認めています。肉牛、乳牛、肉用子牛、豚、羊、山羊、七面鳥、採卵鶏などがあります。英国協会の評価基準とよく似ており、各評価基準を満たしていれば認証を与えられます。

アメリカやカナダのオーガニック食品を販売する大手の食品チェーンであるホールフーズマーケット(Whole Foods Market)は、2011年にアニマルウェルフェアの認証システムを導入し、店頭で販売されているすべての牛肉、鶏肉および豚肉に5段階のウェルフェアレベルを示すラベルを貼付しています。

ドイツやオーストリアでは、有機畜産の判断基準に、Animal Needs Index(ANI)という牛、豚、鶏に関する飼育環境の評価基準が実際に利用されています。乳牛用のANIでは、運動、社会的関係、床、照明と空調、ストックマンシップ(管理者と牛との関係)の5項目から細かく点数をつけ、その合計点数で福祉レベルを評価しています。

EUでは、2004年から2009年まで総額1700万ユーロをかけ、44の大学や研究機関が参加したWelfare Qualityプロジェクトによるアニマルウェルフェア評価法を開発しました。牛(乳用牛、肉用牛、ヴィール子牛)、豚(繁殖豚、肥育豚)、ニワトリ(産卵鶏、ブロイラー)のものがあります。適切な行動、適切な畜舎、適切な健康性、適切な行動の各側面にそれぞれ2-4つの評価基準を、さらに各評価基準に30-60個の各測定項目を設定しています。最終的に農家の福祉レベルを優、良、可、不可のいずれかに判定します。今後はこの評価法を洗練し、第三者機関による認証を目指していきます。

(瀬尾氏の「アニマルウェルフェアについて考える」は随時掲載していく予定です。第2回は59号に掲載し、国内での取り組みについて紹介します。)



■瀬尾 哲也(せお てつや)氏 プロフィール

1968年、山口県生まれ。東北大学大学院農学研究科修了。帯広畜産大学畜産学部講師。道内では数少ない家畜福祉の研究者で、(公社)畜産技術協会のアニマルウェルフェア評価法の作成にも携わる。

都市農業と市民の食卓支える 木田農園(札幌市)



意外と知られていないのですが、札幌は葉物類の大産地です。中でもレタスは道内第2位の生産量を誇っています。そんな新鮮な札幌レタスを私たちに提供し続けているのが、北区拓北にある木田農園の木田良さん(39) =写真= です。

住宅街に広がる農地は約10ヘクタール。レタスだけでも6種類を栽培しています。「札幌の人ならたぶんこの農園のレタスを一度は食べたことがあるのでは」と話すほどです。

このほかキャベツ、ブロッコリー、カリフラワー、白菜を中心に、アスパラガス、スイートコーン、トマト、ピーマン、水菜、大根など少量多品種をつくり、札幌市民の食卓を支えています。

周りには住宅があり隣には拓北小学校があることから、できるだけ農薬や化学肥料を減らす努力も続けています。有機肥料にもおのれないものを使い、畑の周りには虫除け効果のあるペパーミントやレモンハーブなども植えています。

ハウス内のトマトの間にはバジルを栽培しています。バジルとトマトはコンパニオンプランツと呼ばれる間柄で、一緒に栽培することで肥料や農薬を減らせる効果があるそうです。

父親の跡を継いで農業を始めて数年後に父親をなくし、母親と2人で早朝から深夜まで働き続けてきた木田さん。「父親に対して恥ずかしくない農業を続けていきたい」と力を込めて話します。

その木田さんは、今春までJAさっぽろ青年部長を4年間も務めていた札幌農業を支える若手農業者のリーダーでもあり、「儲けはそこそこでいから、地元・札幌の人たちにおいしい野菜を食べもらいたい」と言い切ります。

昨年、畑の隣に農産物直売所「とれたす。」もオープンしました。自慢のレタスも名前に入れました。自分の畑でとれるものだけでなく、仲間がつくった農産物も扱っています。

農作業に加え、若手農家のまとめ役と多忙を極める木田さん。しかし「札幌には元気な若手農家も多いし、僕らが生産する札幌ブランドを世界に発信していきたい」と、大きな目標に向かって奔走する毎日です。



奪い合いのシェアから分かち合いのシェアへ

同志社大学大学院ビジネス研究科教授・エコノミスト 浜 矩子

経済活動とは本来、人間を豊かにし幸せにする人間の営みです。ですから経済活動とまっとうな倫理観や平和、正義といった概念とは、対立するのではないのです。人間を豊かにする営みが経済活動であるなら、経済が人々の暮らしや人権を脅かしてはいけません。

最近、「ブラック企業」という言葉が使われています。人を人として扱わず、人権を侵害するような企業のことを指します。問題のある企業を指した言葉としてはぴたり当てはまるのですが、「ブラック」であるけれど「企業」

であることを認めた言葉なのが、私としては気にかかります。「企業」とはまっとうな経済活動をする会社を指します。ですから「ブラック企業」というと「企業」として認めてしまっているの、単語は成り立たないのではないのでしょうか。

日本はこのブラック企業ならぬ「ブラック国家」になりつつあります。それは安倍首相が唱える「アベノミクス」があるためです。



人間不在のアベノミクス

アベノミクスには4つの問題点があると思います。第1は「人間不在のアベノミクス」である点です。一応は経済政策ですが、「人間の営み」としての経済なのか。昨年6月に安倍首相が行った「成長戦略」のスピーチの内容を見れば分かります。

このスピーチの中で「成長」という単語は41回、「世界」という単語は37回出てきます。成長戦略のスピーチですから成長が最も多いのは分かります。世界という単語も安倍首相はお好きなようで、「世界をリードする」「世界最高水準」「世界で勝つ」などなど目白押しです。しかし「人間」という言葉は、1度しか出てこない。アベノミクスが人を幸せにする、人の営みとしての経済でないことがここから読み取れます。しかも「人間」という単語が大阪万博で出展されたという「人間洗濯機」という単語のみだということも、人間不在のアベノミクスであることを象徴しています。

第2の問題点は「僕ちゃん一番のアベノミクス」であることです。「世界」がお好きな安倍首相の成長戦略の先には、世界征服、世界制覇があり、「僕ちゃんが一番になるんだもん」という自己中心的な考え方が根底にあります。世界各国が共存共栄していかなければならないグローバル社会にあっては、とても危険な思想です。

成長戦略は富国強兵策

「僕ちゃん一番イズム」を支えるのが、成長戦略の先の「富国強兵」です。これが第3の

問題点です。アベノミクスは「強兵のための富国」です。強兵を進めるために、武器輸出3原則を緩和して防衛装備移転3原則などと言葉を変えて、事実上の武器輸出を認めました。第4が「死の商人」としてアベノミクスの問題です。武器の輸出、核の拡散につながる原発の輸出。大企業への法人税減税も大手企業の防衛、原発メーカーへの支援策です。

私は当初、講演などでアベノミクスをアホノミクスと小声で言っていました。今ははっきりと「ドアホノミクス」と申し上げています。ある経済学者が「貿易が戦争に対する最大の防波堤である」と名言を残しています。国際社会の互いに支え合う関係が深まり、相手が必要としているものを互いに提供し合う関係を築いていくことで、幅広く貿易を進める相互依存関係が防波堤になるという考え方に、私は共感します。

グローバル社会をジャングルに例えてみましょう。私たちはこのグローバルジャングルの住人です。ジャングルとは弱肉強食、自然淘汰の世界です。厳しい世界です。しかしその弱肉強食の自然淘汰は、あらゆる生き物たちが共生する生態系が確立しているからこそできる世界なのです。小さな植物から大きな動物まで、人間も含むあらゆる生きとし生ける者たちが共存し、循環する世界があってこそその弱肉強食です。

支え合うのがグローバル社会

頂点に立つ一番強い百獣の王・ライオンもさまざまな動植物に支えられています。淘汰と共生の二人三脚がグローバルジャングルの世界なのです。これを私たちの住む国際社会に当てはめると、互いの貿易を深めていく共生関係があるからグローバル社会を生き残れることにつながります。だれも1人では生きて行けないのです。東日本大震災で宮城県の小さな部品メーカーの生産がストップしたことで、大手自動車メーカーの生産ラインがストップしたことがありました。大きな企業も小さな企業に支えられ、小さな企業も大きな企業に支えられる関係こそが重要です。

そんな共存共栄を目指すグローバルジャングルの中では、世界制覇を目指し他者は排除する「僕ちゃん一番イズム」の思想をもつ人物は、非常に異質ではた迷惑な存在です。グローバル社会のこれからの合言葉は「シェアからシェアへ」です。このシェアは同じ言葉でも違う意味を持ちます。最初のシェアは、市場占有率などの場合に使うシェア、奪い合いのシェアです。後のシェアは、「2人でシェアしよう」などと使う場合のシェア。分かち合いのシェアです。世界制覇を目指す「僕ちゃん一番イズム」は奪い合いのシェアで、破壊的な方向に向かいます。かつてのシェアは市場占有率を高めることを狙う経営戦略でした。しかし今はカーシェアリングやハウスシェアリングという分かち合うシェアに変化しています。「シェアからシェアへ」-180度転換しましょう。

■浜 矩子(はま のりこ)氏 プロフィール

東京生まれ、同志社大学大学院ビジネス研究科教授、エコノミスト。三菱総合研究所初代ロンドン駐在員事務所長などを経て現職。専門は国際経済学。著書に『新・国富論 グローバル経済の教科書』(文春新書)など多数。



青空のもとで大豆畑の見学交流会

プロジェクトリーダー 五十嵐 美由紀

8月30日、岩見沢市北村で「大豆畑の見学交流会」を開催しました。当日はトラスト会員7名、スタッフ2名、北村砂浜地区21世紀協議会（以下「協議会」）3名、計12名の参加でした。生産者の山崎さんからは「去年は大豆の芽が出なくて、何回も畑の土を掘った。今年はこのとおり順調に生育している。」と笑顔でお話してくれました。一面の大豆畑に感激し、記念写真を撮って畑を後にしました。

その後、いつもの池田さん宅で野菜と落花生の収穫体験。今年から協議会会長となった佐藤さん宅で、パーベキューを食べながら交流会を行いました。会長からは「消費者の人が、畑まで来てくれることはありがたい。これからもよろしくお願ひしたい」と歓迎のご挨拶をいただき、トラスト会員からは「毎日少しずつ、大事に食べています」「美味しい大豆だと聞いて、今年から参加しました。将来農家をめざしています」と、みなさん色々な思いをもって参加して下さいました。「少人数でも続けることに意義がある」と、あらためて感じた15回目の交流会でした。



「命をいただく」ことを考える

～食育講座現地学習～

プロジェクトスタッフ 平川 綾子

8月23日の『食育講座』は、安平町の「無何有の郷農園」と「またたびFarm」へ行き、平飼いの鶏の卵や有機野菜の収穫体験と「いのちをいただく」ことを学びました。

行きバスの中ではクイズ形式の予習などで盛り上がり、あっという間に現地到着。まずは無何有の郷農園の平飼い鶏舎で卵の採取。鶏が驚かないようにそっと優しく卵を採る子どもたちの顔は、緊張感と楽しさでいっぱいでした。その後、農園の小路健男さんから鶏についてのお話を聞きました。次の人参収穫は、なんとトラックの荷台に乗っての移動で子どもたちは大はしゃぎ。人参を抜く時や葉を切る時の感触を全身で感じ楽しそうでした。ミニトマト、ナス、ピーマン、完熟トマトやトウモロコシも収穫。そして「いのちをいただく」ことを実感できる昼ご飯の時間。メニューは「鶏のスープ」「採れたて野菜」「採れたて卵」「持参おにぎり」で、材料は鶏舎にいた鶏2羽、卵、収穫したての新鮮野菜。午後は、小路さんと俣野さんのお話を聞き、循環型農業について学びました。



遺伝子組み換え作物と「札幌黄」を学習

プロジェクトメンバー 宍川 誠二

6月24日、理事でもある酪農学園大の中原准一名誉教授が「遺伝子組み換え (GM) 作物の最新情報はどこまで進んでいるのか」と題して講演をしました。参加した会員や一般参

加者約30人は、世界で拡大し続けているGM作物の危険性などについて改めて学習しました。

中原先生はその危険性について、「食の安全を脅かす」「生物多様性を破壊する」「種子を独占し食料支配をもたらす」の3点を具体的に挙げました。そして遺伝組み換え作物が原材料に使用されても表示されない食品が多数流通している現状を指摘し、「消費者一人ひとりがタネについて関心を深めて、しっかりとチェックしていく必要がある」と訴えました。

9月23日には札幌で長らく栽培されてきたタマネギの固有種「札幌黄」を栽培する札幌市北区の澤田農場を訪問しました。澤田農場ではすでに収穫作業を終えていたので、選別作業の様子を見学。他品種と比べて病害虫に弱い特性を持つ「札幌黄」の栽培の難しさなどについてお聞きしました。



どんな家畜の飼い方を望むのか

担当理事 前濱 喜代美

7月19日にアニマルウェルフェア学習会を開催しました。帯広畜産大学畜産学部講師の瀬尾哲也氏から「消費者としてどんな家畜の飼い方を望むのか、を考えるために」というテーマでお話をいただきました。主に乳牛の飼い方について、つなぎ飼い、フリーストール、放牧などそれぞれの問題点などの説明がありました。いずれにしても一番厄介なのが糞尿の処理の問題で、つなぎ飼いは人にとっては究極の省エネ型ですが、牛にとっては食べるのもトイレも搾乳もずっと同じ場所という劣悪な環境であることがわかりました。

よくあるフリーストールは、寝る所を自由に選べる利点はあるものの、糞尿の処理をしっかりとしないと牛の足が汚れて、足が悪くなることもあるそうです。放牧では牛は糞を避けて寝るようですが、体をこすり付ける木や水飲み施設、日陰、牧道の整備などの手間がかかります。放牧牛は青草を食べているせいか乳のビタミンAが多いようですが、肉牛ではサシを入れるためにビタミンA除去食が行われている場合もあるそうです。

牛は学習能力が高く、人の識別ができ、優しい人と手荒い人では乳量や糞尿の量が違うそうです。消費者として出来ることを提言いただきました。①自分の生き方を食べ物に反映させる。②自分の目で確認する。③農家や流通業者へ要望を伝える。④マイファーム(お気に入りの農場)を持つ。⑤ハレの日だけでも生産者がわかる畜産物を購入する。

次に現場からの報告として、安平町内藤あながす牧場の内藤圭子氏から「健康な牛はおいしい!」をテーマにお話をいただきました。元々林業の下草刈りの為にアンガス牛を導入したのですが、平成17年からエサは国内自給率100%にこだわり、肉の販売も手掛けています。欲しいという消費者と結びついて生産ができていて、消費者の選択は大きいと生産者として感じていることなどを話していただきました。「消費者側の価値観を変えていくことが必要」「サシの入り方で価格が決まる日本ではアニマルウェルフェアの考え方がなかなか定着しない」など会場との質疑応答もありました。

(今号から「アニマルウェルフェア(家畜福祉)」の活動報告の掲載を始めます。タイトルは「あにふく」です。「築食ラボ」は学生会員との都合がつかず集まりを持っていませんので、今後は昨年度に学生会員から要望のあったアニマルウェルフェア学習会などの活動への参加を呼び掛けていきます)

八剣山果樹園で自然エネルギーを学ぶ

担当理事 泉屋 めぐみ

晴天に恵まれた9月6日、札幌市南区の八剣山果樹園で18人の参加者を迎えて会員交流会を行いました。同果樹園の桜井学代表の奥さんと、札幌市の環境保全アドバイザーのピアンカ・フルストさんからドイツの脱原発の取り組みのお話を聞きました(写真右)。

同果樹園内にはピアンカさんのログハウスがあり、そこで札幌市民や海外留学生を招き環境、自然エネルギー問題について勉強会やセミナーを開いています。ピアンカさんはドイツ政府からの脱原発に関するさまざまな提案や仕組みづくり、ドイツ市民の自然エネルギーを進める実際の取り組みを話しました。

具体的例として、個人の家庭では、しっかり断熱(エネルギーリフォームに補助金)してから少しの暖房を使うようにすることで思い切った省エネが実現できていること、各家庭の屋根にソーラーパネルを乗せて、発電した電気を自分たちが使って余れば売電すること、企業では工場の余った熱を周りの事業所の暖房などに使う「熱マッチング」が行われていることなどを紹介しました。

自然エネルギー関連で、自動車産業並みの37万人の雇用ができていたなど、さまざまな創意工夫で脱原発が進んでいるドイツの状況を知ることができました。ピアンカさんは「ただ我慢するのではなく、楽しんで工夫し、ちょっとは自分にもメリットが有るのがエコな暮らしを広げます」と強調しました。

八剣山果樹園では太陽光発電を利用した水のポンプ(野菜の栽培や高所での畑の水やり)、太陽熱利用の給湯システム(レストランで使用する3日分のお湯を蓄熱)、湯を沸かすソーラーコレクター、ジャガイモなどを焼くペレットグリル、微生物で糞尿を処理し出来た肥料を隣の畑で使うバイオトイレなど、自然エネルギーを生かしたさまざまな取り組みを実際に行っていました。八剣山果樹園という広い場所だから出来ることもあるのですが、少し工夫すれば私たちにも出来そうなことも随分とありました。



ドイツ風ケータリングランチ(写真左)の後は八剣山ふもとを自由に散策し、ワイナリー見学や果樹園内の池での魚釣り、近隣農家の直売所で野菜・果物を購入するなど、里山ならではの時間を満喫しました。





オススメ本の紹介 てんとう虫ライブラリー



農業・農村で
幸せになろうよ

林美香子著

林美香子



新しい
三書方
で表現できる
農都共生

「物の豊かさ」と
「心の豊かさ」—
どちらを求めますか

農都共生

『農業・農村で幸せになろうよ』

林美香子著、安曇出版発行
(四六判、192頁、本体価格1,500円)

この本をひと言でいうと、農村を基盤とする地域を元気にする要素がいっぱい詰まっているということに他なりません。「農業・農村の現場から」「農業・農村とツーリズム」「農業・農村と地域活性」の3章構成で、他に座談会や特別対談を組み込んでいます。著者の年来のテーマである、「農都共生」の実践者たちが、見事に描かれています。

自称「半農半コンサル」の曾根原久司氏は、異彩を放っています。氏は東京で金融機関向けのコンサル会社経営の傍ら耕作放棄率の高い山梨県に着目し農村起業でブレークスルーした人物。都内の「半農半コンサル」から山梨県北杜(ほくと)市に拠点を置くNPO法人「えがおつなげて」代表として、文字通り八面六臂の活躍をしているからです。

曾根原氏は、自給農家(耕作放棄地の開墾)からスタートし、開墾し農産物を作り食料自給を行なっています。非凡な氏はそれに止まらず、八ヶ岳山麓付近の薪ストーブを使う別荘族向けにも焦点を定め、山林の地上権を購入し樹木を伐採し「丸太売り」を行なったのです。

今回は「薪割り体験」を組み合わせその丸太をチェーンソーで薪にしてもらいました。薪割りは別荘族の都会人には適度な運動で、曾根原氏は巧まらずして食料自給とともにエネルギーの自給も果たしたのです。最終的には年間300トンの薪を販売。もうこれは「半端」ではなく、最近のヒット映画「ウッド・ジョブ」の先取りです。

季刊フリーペーパー「南アルプスイなか新聞」も発行し、「田舎暮らしは楽しいよ」のコンセプトで情報発信にも努めています。同紙の下段は自社広告で「薪割りツアー」「農家レストラン」「山仕事を手伝います」「農具・民具回収します」等々の地域情報で満載です。フリーペーパー経由の売り上げで年間1000万円に達したという曾根原氏は、農村起業を目指す人びとを糾合してNPO法人「えがおつなげて」を立ち上げました。ここに地域活性化、農村が元気になるヒントが宿されています。

著者の林美香子さんは、曾根原氏の他に丹念に全国を踏査して「農都共生」のためにキラリ輝く人びとを取り上げています。かれらに共通しているのは、「経済の循環」「情報の循環」「人材の循環」の3つのリンクができています。この20年来、「農業の多面的機能」がいわれて久しいのですが、本書はその具体化の事例を見事に描いており、林さんのファクト・ファインディング(実情調査)を通じてのリアリストの眼に負うところが大きいです。

農業・農村に関心を持つ人びと、とくに都道府県や市町村自治体の産業行政に携わる人びとにも読んでほしいと願っています。

(札幌大谷大学特任教授、酪農学園大学名誉教授、自給ネット理事 中原 准一)

食の自給フォーラム2015 『佐々木十美さん 食を語る』(仮題)

- 日時 2015年2月21日(土) 13:30~
■会場 札幌エルプラザ 3階 大ホール(札幌市北区北8条西3丁目)
■講師 佐々木 十美 氏(置戸町 食のアドバイザー、元置戸町学校給食栄養士)

佐々木さんは置戸町学校給食の栄養士として長年活動されてきました。その活躍は新聞テレビ等で紹介され、全国で大きな反響を呼び、今や「食のカリスマ」「学校給食の達人」として全国各地から講演や食指導のオファーが殺到するほどになっています。全国を飛び回り活躍を続ける佐々木さん。しかしどんなにもはやされようと、その姿勢は学校給食と日々向き合っていた頃と少しも変わってはいません。より良い食を1人でも多くの人に伝えるため、誠実に真摯に活動を続けています。

フォーラムでは、気さくで飾らない人柄の佐々木さんに大いに語っていただきます。久しぶりに自給ネット主催で行うフォーラムです。たくさんの皆様にご参加いただければ幸いです。(次回発行の会報にフォーラムのチラシを同封します)

アニマルウェルフェア学習会 第2弾

『不健康な動物から健全な食べ物が得られるか?』

- 日時 2014年10月25日(土) 13:30~16:00
■会場 札幌エルプラザ 2階 消費者サロン1・2
■講師 酪農学園大学 荒木 和秋 先生
「牛たちはどのように生活をし、生涯を終えるのか」
北海道農政部 中田 剛司 氏
「アニマルウェルフェアの考え方に対応した乳用牛の飼養管理指針について」

チラシを
同封して
います

種プロジェクト学習会 第3弾

『自然農法と種の自家採種を学ぶ』

- 日時 2014年12月6日(土) 14:00~16:00
■会場 札幌エルプラザ 2階 消費者サロン1・2(予定)
■講師 伊達 寛記 氏 (自然農法「ファーム伊達家」代表)

チラシを
同封して
います



自給ネットの活動も折り返しです。今年は新しくアニマルウェルフェア(通称あにふく)がはじまり大豆、食育、タネ、あにふくと活発に活動しています。2015年2月のフォーラムも決まり自給ネット後半の活動も盛りだくさん。会員以外も参加できる事業もありますので、ぜひお友達を誘ってご参加ください。
(事務局 本村 雅幸)